



吉増剛造展

残されるということ。

I.W 若林奮 V.S. G.Y 吉増剛造

2022.5.14 (Sat) - 6.12 (Sun)

■アクセス■

- ・東武伊勢崎線足利市駅徒歩 12 分・JR 両毛線足利駅徒歩 8 分
- ・北関東自動車道足利 IC より 15 分
(駐車場 3 台・近隣にも無料駐車場あり)
- 11:00~18:00 (最終日は 16:00 まで)
月・火曜休廊 (月・火が祭日の場合は営業し、翌日休)
- 軽食とソフトドリンクもお楽しみいただけます。



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通 2 丁目 2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>

鮎川の光跡、武蔵野の残影

鮎川の海面は武蔵野の地表と表裏一体となり、時空を超えていく。

吉増剛造にとって、故郷・武蔵野の地は創作の源泉であり続けた。その関わりは、同じく武蔵野に生まれ育った彫刻家・若林奮との30年におよぶ交流を経て、いっそう深められたといえる。

二人の関係の発端である、若林の挿画による吉増の第三詩集『頭脳の花』（青地社）が1971年に刊行されてから、50年あまりの年月が経つ。吉増は、『草書で書かれた、川』（1977年、思潮社）や『オシリス、石ノ神』（1984年、思潮社）など、武蔵野の面影を宿す詩集を刊行した後、時を経て1999年～2000年、季刊『武蔵野美術』（武蔵野美術大学出版部）の誌上で、若林のドローイングに自身の言葉や写真を交差させるような連載を行った。さらに1990年代以降、吉増は、若林が自作したハンマーとたがねで文字や言葉を銅板に打刻する作品の制作を続けている。

詩作から飛翔し、写真、造形、映像へと大きな広がり見せる吉増の創作であるが、若林奮との長年の関わりを振り返ると、時代ごとの節目で若林の影響があったことに気付かされる。そしてその奥底には、吉増の意識の内を照らす武蔵野の光を、残影として見出すことができる。

吉増は、大災害に見舞われた牡鹿半島の漁村・鮎川の海に面したホテルニューさか井の一室で、2019年から断続的に滞在しつつ、この地を照らす光を記述し続けている。その窓から見える海の景色に、武蔵野の面影、そして若林奮の残像を重ね合わせる時、鮎川の地がまとう光は、60年にわたる詩作の時間を経た吉増が未踏の彼方へ回帰するための、新たなビジョンになり得るだろう。

篠原誠司（足利市立美術館学芸員）



吉増剛造 銅板打刻作品
1990-2000年



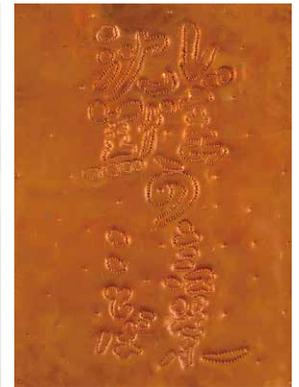
若林奮 ドローイング 1999.3
（『武蔵野美術』No.112挿画）
1999年



若林奮 ドローイング 1995.12.10
1995年



若林奮 ドローイング 2000.7.23
（『武蔵野美術』No.118挿画）
2000年



吉増剛造 銅板打刻作品
1990-2000年

■ライブパフォーマンス■

出演：吉増剛造、マリリア

- ・5月14日（土）15:00～
- ・定員20名（予約制）
- ・2,000円（ワンドリンク付）



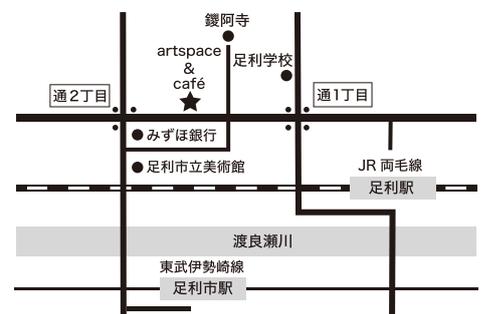
マリリア



ホテルニューさか井にて 撮影：岩本圭司

吉増剛造 Gozo Yoshimasu

1939年東京生まれ。慶應義塾大学国文学科卒業。在学中から詩作を始め、1964年の第一詩集『出発』以来、先鋭的な現代詩人として国内外で活躍。同時に詩の朗読パフォーマンスを行い、80年代からは銅板に言葉を刻んだオブジェや写真作品を発表。2016年には個展「声ノマ全身詩人、吉増剛造展」を東京国立近代美術館で開催。2017～18年には、個展「涯テノ詩聲（ハテノウタゴエ）」（2018年）を足利市立美術館、沖縄県立博物館・美術館、渋谷区立松濤美術館で開催。2018～19年には、福島県内の3館、福島県立博物館、はじまりの美術館、埴谷・鳥尾記念館文学資料で吉増剛造展を開催。2019年、Reborn-Art Festival(石巻市)に参加。2020年より、「葉書ciné」をYouTubeにて配信。2021年『詩とは何か』（講談社現代新書）『Voix』（思潮社）出版。



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通2丁目2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>